



# 自己点検・評価報告書

(令和4年度)

令和5年6月

本学は、令和3年度に一般財団法人大学・短期大学基準協会による認証評価を受審し、令和4年3月11日付で適格と認定されました。高等教育機関としての社会的責任を果たすため、引き続き全学的に点検・評価活動に取り組み、教育・研究の更なる充実に取り組んでいます。この点検・評価活動を推進するため、次の学内組織において、PDCAサイクルを用いた改善シートを作成し、業務及び活動の恒常的な検証を試みています。

- ・ こども学科
- ・ 総務部 総務課
- ・ 管理部 施設・管理課
- ・ 経理・財務部 経理・財務課
- ・ 教務学生部（豊岡キャンパス） 教務学生課
- ・ 教務学生部（姫路キャンパス） 教務学生課
- ・ 図書館 図書館事務課
- ・ 通信教育事務部 通信教育事務課
- ・ 自己点検・評価委員会
- ・ 学務委員会
- ・ 入試対策・学生募集委員会
- ・ 教務委員会
- ・ 教育改善実施（FD）委員会
- ・ 個人情報保護委員会
- ・ 学生指導委員会
- ・ 進路指導・編入委員会
- ・ 研究倫理委員会
- ・ 図書委員会
- ・ 公開講座委員会
- ・ 紀要委員会
- ・ こども学科実習委員会
- ・ 職務改善・推進（SD）委員会
- ・ 地域交流委員会
- ・ 教育情報公開運営委員会
- ・ 食堂運営委員会
- ・ 奨学生委員会
- ・ 防火・防災管理委員会
- ・ ハラスメント防止委員会
- ・ 衛生委員会

自己点検・評価委員会が、認証評価の結果及び本学の中長期計画を踏まえた自己点検・評価活動により、これらの学内組織の改善シートを検証した上で、教授会で審議しています。この PDCA サイクルによる改善シートを検証し、学内組織が活動することにより、一貫した方針に基づいた点検・評価が可能な体制を構築しています。

また、「学習成果及び教育効果の検証に関する方針（アセスメントポリシー）」に基づき、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーのそれぞれに照らして、学習成果・教育効果の検証を行っています。

これらの PDCA サイクルによる活動成果、各基準に則った課題の検証及びアセスメントポリシーに基づく学習成果・教育効果の検証結果を本学の自己点検・評価報告書としています。

## 基準 I 建学の精神と教育の効果

令和 3 年度認証評価受審に伴う報告書の本基準における今後の改善計画は、次の通りです。

本学の教育目標及び学習成果は、社会的通用性があると判断しているが、今後も社会に役立つ人材、ステークホルダーが求める人材を養成するため、社会が求める教育を実施できているか点検を継続する必要がある。そのため、就職先へのアンケート調査、学生の実習受入先との実習情報交換会を実施し、地域社会の意見に基づく教育目標及び学習成果等の検証を行い、必要に応じて改善していく。

GPA 制度の導入やカリキュラムマップを基にしたカリキュラムツリーの整理、アセスメントポリシーの策定等、学生にとっても教職員にとっても、学習成果をより正確に把握する仕組みを整備している。これらは、学習成果を把握するためのツールであると同時に、自己点検・評価活動を推進するためのツールである。すなわち、各部署及び各委員会の PDCA 活動、教員による授業改善の PDCA 活動に、これらの新たなツールを追加し、内部質保証を推進していくことが必要である。そのために、それぞれのカリキュラムマップやアセスメントポリシーなどのツール自体を改善していかなければならない。また、それぞれのツールを扱う教職員の意識・知識も絶えずアップデートしていく必要がある。今後も、本学が社会的使命を果たしていくために、学長のリーダーシップのもと、自己点検・評価委員会が中心となってこれまで以上に組織としての改善活動を実施していく。

この改善計画に基づく、学内組織の PDCA による検証は、次の通りです。

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
①「建学の精神」と「教育目標」の実現に向けて、カリキュラムの見直し等により教育内容の充実を図る。	①認証評価を通して、「建学の精神」と「教育目標」の実現に向けて、カリキュラムの変更や各種規程の改変を行った。 また、「キャリアアップⅡ」の教育内容を見直し、インターンシップを実施した。実習前に子どもと触れ合う実習疑似体験を通して、保育者を目指す学生として多くの学びを得た。
②就職先へのアンケート調査、学生の実習受入先との実習情報交換会を実施し、地域社会の意見に基づく教育目標及び学習成果等により検証するとともに、アセスメントポリシー自体の適切性を検証する。	②短期大学生調査、授業評価アンケート、実習情報交換会等に基づく、アセスメントポリシーにより、教育目標、3つのポリシー及び学習成果等を検証したが、アセスメントポリシー自体の検証はできなかった。

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
③カリキュラムマップ、カリキュラムツリーやアセスメントポリシーを再周知するとともに、日々の授業や業務で意識付けするような教職員研修会を検討する。	③教職員研修会を検討したが、実施に至らなかった。カリキュラムマップ、カリキュラムツリーやアセスメントポリシーを再周知するとともに、その役割と意味合いに関する研修が必要である。
④各部署・委員会の PDCA サイクルによる業務改善シートを確認・検証する。	④各部署・委員会の PDCA サイクルによる業務改善シートを基に、学校法人の中長期計画、本学の自己点検・評価報告書との連動性を確認・検証し、一部の部署・委員会に計画の見直しを依頼した。
⑤PDCA サイクルによる業務改善シートの作成ガイドラインを周知・徹底する。	⑤PDCA サイクルによる業務改善シートの作成ガイドラインを周知し検証を行った。
⑥GPA に対する学生の理解促進、また GPA の学生指導への活用促進を行う。	⑥後期ガイダンスにおいて、前期成績の GPA の確認を行い、今後の学習に生かせるよう指導を行った。また、「豊岡短期大学 GPA に関する規程」の改正を行い、指導助言の対象となる学期 GPA の値を改めた。
⑦カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの活用について検討する。	⑦カリキュラムマップ・ツリーはオリエンテーションで周知するとともに、学生便覧に掲載している。ナンバリングを教育課程の学習成果、カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの各科目の関連性を示したコード体系とした。

## 基準Ⅱ 教育課程と学生支援

令和 3 年度認証評価受審に伴う報告書の本基準における今後の改善計画は、次の通りです。

学習成果の点検は、平成 31 年度から本学における教育課程を大幅に変更したため、就職先へのアンケート調査結果等をアセスメントポリシーに基づき取りまとめることにより、新教育課程の学習成果、カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの各科目の関連性を検証していく。また、教育課程をより体系的に示す指標として、ナンバリングを授業概要（シラバス）に整備する。

成績評価は、授業概要（シラバス）において成績評価の基準を示した上で、それぞれ第 1 回目の講義で科目担当者が説明しており、十分に客観性・公平性を確保している。通信教育部がすでに導入しているルーブリック評価は、「何が評価されているのか」の評価の規準と「意欲・態度、思考力・表現力、知識・技能の獲得度合等」の基準を明示する仕組みであり、公平性・客観性及び厳格性をより担保できる。このルーブリック評価の導入を通学部でも検討する。

コロナ禍のため、通常の学生支援が制約を受ける中で、さまざまな創意工夫をして学生支援を行い、令和 2 年度入学生の退学者は 0 人であった。このコロナ禍で工夫し実践した取り組みを検証し、コロナ収束後も学内 SNS による定期的な情報発信等による学生支援を行っていく。

学習上の悩みや適切な指導助言を行う体制をより強化するため、令和 3 年度よりオフィスアワーを設け、授業概要（シラバス）や学内 SNS 等により周知し、学生支援を継続する。今後もオフィスアワーの在り方を含めて、学生が学習上の相談をしやすい環境を検討していく。また、姫路大学が主体となっている食堂・売店やクラブ活動等の学生へのサービス向上のため、姫路キャンパスの学生の声を集約し、姫路大学と協同して対応にあたるよう努める。

この改善計画に基づく、学内組織の PDCA による検証は、次の通りです。

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
<p>①コロナ禍で工夫し実践した取り組みを検証し、コロナ収束後も学内 SNS などによる定期的情報発信等による学生支援を行うとともに、オフィスアワーの在り方を含めて、学生が学習上の相談をしやすい環境を検討していく。</p>	<p>①学内 SNS などによる定期的情報発信等による学生支援は軌道に乗ってきた。オフィスアワー等の相談しやすい環境ができつつある。また、学生とのコミュニケーションツールとして、教務システム（Active Portal）に連動する「Melly」を積極的に活用し、タイムリーで様々な情報を個々の学生に伝達することにより、学生支援に利用した。ただし、「Melly」による情</p>

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
	報発信に関して、学生・教員・教務学生部が共通する使用ルールを定め、適切な使用方法を検討する必要がある。
②教育課程の透明性を高めるため、教育課程の体系的指標として、科目のナンバリングの整備と学生評価にルーブリック評価の導入を検討する。	②ナンバリングは、教育課程の学習成果、カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの各科目の関連性を示したコード体系とした。ルーブリック評価に関しては、次年度の教員編成時期を前倒しして、教員に新規作成してもらえる時間を確保する必要がある。
③就職先アンケート調査結果等をアセスメントポリシーに基づき取りまとめることにより、新教育課程の学習成果、カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの各科目の関連性を検証する。	③短期大学生調査や実習情報交換会等をアセスメントポリシーに基づき取りまとめ、教育課程の学習成果、カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの各科目の関連性を検証した。その結果としては、関連性が認められると判断した。
④公正かつ客観的な成績評価のために必要な、試験の成績の公表や、成績評価に対する学生からの疑義の受付・対応などについて、指針を定め、必要であれば規則、取り扱い細則を作成する。	④「豊岡短期大学試験規程」を廃止、「豊岡短期大学単位授与規程」を新たに制定し、学生の成績評価に関し、異議申し立てを行うことができる旨を明示した。
⑤併設姫路大学と合同となる食堂・売店、クラブ活動等といった内容に関する満足度調査を実施する。	⑤併設姫路大学と合同となる食堂・売店、クラブ活動等といった内容に関する満足度調査の実施ができなかった。
⑥姫路キャンパスでの進路ガイダンスのあり方や、1年生が早い段階から進路に対する意識を高めることが必要である。	⑥豊岡・姫路キャンパスで1年生は3回、2年生は4回のほぼ同様の進路ガイダンスを行った。また、社会人力向上セミナー、ハローワークや卒業生からの講和により、進路に対する意識を高めることができた。
⑦実習先（園・施設・所）との情報交換会を進路指導・編入委員会と連携して実施する。	⑦実習先との情報交換会を進路指導委員会と協働して実施し、昨年度に比べ参加園が増えた。より建設的な意見交換ができる方法を検討する。

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
⑧ポートフォリオの一つである履修カルテの円滑な実施・運営ができるような仕組みを整える。	履修カルテの学生指導をオリエンテーション時に行い、教務システム（Active Portal）上での運用がスタートした。履修カルテの内容、活用方法について引き続き検討していく。
⑨学習行動調査を実施し、教育活動の見直しに活用する。	学習行動調査を実施し、短期大学生調査と比較分析を行った。予習・復習の課題や時間を明確にするため、シラバス作成の際に教員に協力を求めていく。



## 基準Ⅲ 教育資源と財的資源

令和 3 年度認証評価受審に伴う報告書の本基準における今後の改善計画は、次の通りです。

ライフ・ワークバランス実現のために、総務部総務課や衛生委員会が主体となり、グループウェア「e3office」の電子掲示板を利用して、情報提供により有給休暇取得率の向上を図る。授業、学生指導や委員会活動等の教育活動と研究活動をより高いレベルで両立させるために、2 つの活動の両面を適切に評価できる人事制度、研究活動を推奨する研究費配分や研究活動の時間をさらに確保するための仕組みを検討していく。また、研究倫理は、研究者に求められる基礎的部分であるため、研究倫理委員会による定期的な情報発信や研修会の実施等を検討し、研究倫理を遵守する意識を高める対応を強化する。

全学研修会、各部署による部内研修会や学外研修会等の SD 活動に加えて、大学職員としての資質向上を図る部署を横断する研修会の実施を検討する。

豊岡キャンパスでは、令和 3 年度実施予定の高圧設備修繕工事の第 5 期工事において、電気設備の大規模改修が完了予定であるが、校舎及び校舎内の設備が老朽化している。給排水設備及び空調設備も大規模改修となるため、工期を細分化することにより、単年度の予算計上金額を抑制した上で、計画的な修繕あるいは入替を検討する。

姫路キャンパスの開設及び新型コロナウイルス感染症拡大防止対策によるオンラインの授業や会議が増加していることに伴い、校舎内無線 LAN 化のエリア拡大、オンライン授業配信用教室の整備や情報セキュリティに関する意識の向上等、物的環境及び人的環境を整備していく。

通学部は令和 3 年度に入学定員及び収容定員を充足した。2 年連続で入学定員を充足し、増加しつつある入学志願者に対応するため、令和 4 年度から収容定員増を予定している。これに伴い、さらなる積極的な募集活動により、増加する定員を満たし、収支均衡を目指す。

この改善計画に基づく、学内組織の PDCA による検証は、次の通りです。

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
①教育活動と研究活動の両面を適切に評価できる人事制度、研究活動を推奨する研究費配分や研究活動の時間をさらに確保するための仕組みを検討していく。	①教育活動と研究活動の両面を適切に評価できる人事制度、研究活動を推奨する研究費配分や研究活動の時間をさらに確保するための仕組みづくりはできなかった。

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
<p>②衛生委員会と協働し、教職員の有給休暇取得率の向上に努める。また、グループウェア「e3office」の電子掲示板を利用し、労働災害時の対応、健康管理、コロナ感染予防についてなど、定期的に周知する。</p>	<p>②1人5日以上の有給休暇早期取得を達成するため、衛生委員会と協働し、「e3office」の電子掲示板から情報提供を行った。今後も早期取得に関するはたらきかけを行う。グループウェア「e3office」の電子掲示板を利用し、労働災害時の対応、健康管理、新型コロナウイルス感染予防についてなど、定期的に周知した。</p>
<p>③施設・設備の大規模改修工事について、工期の細分化による単年度予算の計上金額を抑えた計画を立案するとともに、校舎内無線LAN化のエリア拡大工事の計画検討も行う。</p>	<p>③施設・設備の大規模改修工事について、工事の細分化による単年度予算の計上金額を抑えた事業計画を提出した。また、校内無線LAN化のエリア拡大工事を計画し、令和5年度に実施予定となった。</p>
<p>④カリキュラムマップ、カリキュラムツリーやアセスメントポリシーを再周知し、日々の授業や業務で意識付けするような教職員研修会を検討する。</p>	<p>④教職員研修会を検討したが、実施に至らなかった。カリキュラムマップ、カリキュラムツリーやアセスメントポリシーを再周知するとともに、その役割と意味合いに関する研修が必要である。</p>
<p>⑤収容定員増の申請に伴い、さらなる積極的な募集活動により、増加する定員を満たし、収支均衡を目指す。</p>	<p>⑤収容定員増に依らない収入増策を考え、具体化に向けて取り組むことはできなかった。</p>
<p>⑥定期的な情報発信や研修会の実施等を検討し、研究倫理を遵守する意識教育を行う。</p>	<p>⑥定期的な情報発信や研修会の実施等を検討し、研究倫理を遵守する意識教育を行うことはできなかった。</p>
<p>⑦学生が実習前に子どもと接する機会を設け、学習成果を向上できるよう、令和3年度に保育士養成校の図書館として、こうのとり認定こども園の園児（保護者）や地域住民等を対象とした「読み聞かせ会」等のイベントスペースを設けた。今年度はコロナ禍により、実施できなかったが、今後イベントスペースの有効活用を検討する。</p>	<p>⑦こうのとり認定こども園の園児（保護者）や地域住民等を対象とした読み聞かせ会「おはなし会」を毎月第一火曜に実施した。「おはなし会」の一般参加者の事前申し込みがない場合の対応をこども園と協議する必要がある。</p>

改善・見直を図る事項	改善・見直の結果
⑧教員が「学術懇話会」の実施に向け、コロナ禍でも開催可能な方法の見直しを行う。	⑧教員の学術研究向上のため、「学術懇話会」を実施した。毎年度の定期開催に向け、計画的に立案する必要がある。
⑨各部署で行われている研修が管理運営マネジメントを意識した業務の効率化・レベルアップを図る内容となっているかを確認し、委員会として研修成果を年度末に取りまとめる。また、各部署だけでなく、部局横断型の研修会を充実させるための体制を整備する。	⑨各部署で行われている研修が管理運営マネジメントを意識した業務の効率化・レベルアップを図る内容となっているかを確認し、委員会として研修成果を年度末に取りまとめた。また、部局横断型の研修会を実施し、研修会の幅・職員の知識の幅が広がることが期待される。さらに、全教職員を対象に全学研修会を実施した。

## 基準Ⅳ リーダーシップとガバナンス

令和 3 年度認証評価受審に伴う報告書の本基準における今後の改善計画は、次の通りです。

本学は姫路キャンパスの設置に伴い、2 つのキャンパスを円滑に運営することが必要なため、オンライン会議を積極的に活用することにより委員会活動を活発化するなど、学長のリーダーシップのもと、教職協働を強化していく。

評議員会の多種・多様な意見を基に、理事会により意思決定することが重要である。理事会及び評議員会の実出席率を向上させ、より活発な会議とするため、理事及び評議員に積極的な出席を促していく。

この改善計画に基づく、学内組織の PDCA による検証は、次の通りです。

この基準に関しては、各部署・委員会が担当しないため、自己点検・評価委員会により、令和 4 年度の状況について、次の通り検証した。

- ・学長は、豊岡・姫路キャンパスがそれぞれ円滑に運営できるように、各委員会の実施に関して、オンライン会議による実施を推奨した。これにより、委員会活動が活発化し、教育活動・研究活動で教職協働により改善を図っている。また、委員会活動を活発化させるため、各委員会の委員長を招集し、委員会目標の共有及び具体的な活動計画の指導・助言を行った。
- ・理事長は、コロナ禍における理事会及び評議員会において、出席率が向上するよう理事会及び評議員会のオンライン開催を導入するなど、学校法人の意思決定のための議論が活発となるように努めた。

## まとめ

本学は全学的に点検・評価活動に取り組み、教育・研究の更なる充実に取り組むため、学内の各部署・委員会において PDCA サイクルを用いた改善シートを作成し、教授会及び自己点検・評価委員会が、業務改善シートを検証することにより、一貫した方針に基づいた点検・評価を実施している。

また、令和 2 年度に策定した「学習成果及び教育効果の検証に関する方針（アセスメントポリシー）」に基づき、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーのそれぞれに照らして、学習成果及び教育効果の検証を行なった。この検証の結果、令和 4 年度の学習効果及び教育効果は、改善すべき事項もあるが、適切と判断している。なお、建学の精神、教育目標、三つの方針と学習成果は直結しており、学習成果の点検活動を通して、建学の精神も確認している。

アセスメントポリシーに基づく検証及び令和 4 年度の課題に則った各部署・委員会の活動状況を点検・評価した結果、令和 4 年度の本学の教育・研究活動は適切に実施していると判断している。しかしながら、解決した課題がある一方で、令和 5 年度に向けて改善が必要な事項もあるため、引き続き担当部署・委員会がそれぞれの課題解決に向けて取り組み、本学の教育・研究活動の改善を図っていきます。

アセスメントポリシーによる学習成果及び教育効果の検証 **アドミッションポリシー**

アセスメントポリシー		
	資料	結果と解釈
機 関 レ ベ ル	①各種入学選 抜	合格者 36 名、入学者 34 名であった。 入学者の評定平均値の平均は 4.01（標準偏差 0.62、最高値 4.9、最低値 2.8）、小論文試験の平均点は 78.45（標準偏差 7.45、最高点 92、最低点 62）、面接試験の平均点は 76.93 点（標準偏差 7.24、最高点 94、最低点 62）であった。 本年度は、アドミッションポリシーに合致する学生を募集することができたといえる。
	②学生調査	短期大学調査からも、本学が第一志望であった割合が 93%（全国平均 88%）であった。また、本学に進学を決める際に重視した点として、「就職するのに必要な資格が取れる」の項目に 96%が「重視した」「やや重視した」と回答している（全国平均 87%）。専門職として社会で活躍するという高いモチベーションを持った学生が入学していることが伺える。
教 育 課 程 レ ベ ル	①各種入学選 抜	本学は単学科となるため、機関レベルと同一となる。
科 目 レ ベ ル	③入学前課題 の確認試験	2022 年度入学生の一般教養テスト結果を 2021 年度（問題は同一）と比較すると、平均点は 27.3 から 26.2 に下がっているが、2020 年度入学生の平均点は 26.5 であったことを考えると、入学者の学力は一定程度維持できていると考えられる。入学時の一般教養テストがその後の成績をすべて予測するものではないが、ある程度の相関はあるため、学力面で平均よりも遅れを取っている学生に対しては、学習上の支援が必要となる可能性もある。

アセスメントポリシーによる学習成果及び教育効果の検証 **カリキュラムポリシー**

		カリキュラムポリシー
		結果と解釈
資料		
機 関 レ ベ ル	①退学状況	令和3年度入学生45名 退学者4名、休学者0名
	②休学状況	令和4年度入学生41名 退学者1名、休学者0名 このことから、教育・学生支援の成果が見られる。
	③短期大学生調査	<p>・学習意欲、学修行動に関する項目</p> <p>「Q11 あなたが受講した授業では、次のようなことはどのくらいありましたか。」の質問項目は、4件法（よくあった、ときどきあった、あまりなかった、まったくなかった）で調査が行われている。「よくあった」及び「ときどきあった」を合算した割合（以後、「あった」と表現）が、全国平均と10ポイント以上乖離しているものについて取り上げる。</p> <p>「学生同士でディスカッションする」の項目については、本学は「あった」と回答した学生の割合が97%（全国平均87%）であった。</p> <p>「正解や答えのない問題や課題について考える」の項目については、77%（全国平均67%）であった。</p> <p>「教員が提出物に添削やコメントをする」は、「あった」と回答した学生の割合が88%（全国平均77%）であった。なお、昨年度は本学の平均が59%であったことと比較すると、大幅な向上が見られた。</p> <p>単なる知識の伝達にとどまらず、学生が主体的に考える授業が展開されつつあると考えられるため、より良い授業展開を全学的に共有し、広げていくため、今後もますますのFD活動の充実が期待される。</p> <p>一方で、「図書館を利用する」は、「あった」と回答した学生の割合が26%（全国平均42%）であった。「プレゼンテーションをする」は、「あった」と回答した学生の割合が48%（全国平均65%）であった。「パソコンなどの情報機器を使う」は、59%（全国平均86%）であった。</p> <p>これらの結果は直ちにネガティブなものとも限らないが、授業の広がりとして、図書館やパソコン等で調べたり、まとめたり、プレゼン形式で発表したりといった部分では、全国平均と比較すると行われていない傾向にあることが読み取れる。</p> <p>・成長実感に関する項目</p> <p>「Q19 今の短大に入学して、あなたの能力や知識はどの程度変化（向上）しましたか。」の質問項目は、5件法（大きく増えた、増えた、変わっていない、減った、大きく減った）で調査が行われている。「大きく増えた」及び「増えた」を合算した割合（以後、「成長実感がある」と表現）が、全国平均と10ポイント以上乖離しているものについて取り上げる。</p>

		<p>「地域や社会に貢献する意欲」の項目については、成長実感がある学生の割合は、<b>65%</b>（全国平均 <b>50%</b>）であった。地域ボランティアの授業や地域交流活動が奏功していると考えられる。</p> <p>「プレゼンテーションをする力」の項目については、成長実感がある学生の割合は、<b>37%</b>（全国平均 <b>53%</b>）であった。「PC など情報機器を使う力」の項目については、成長実感がある学生の割合は、<b>44%</b>（全国平均 <b>69%</b>）であった。これらの項目に関しては、授業に関するアンケートと同様の傾向が読み取れる。</p>
	④ 学生満足度調査・学習行動調査	<p>本学が実施する学習行動調査において、「授業の予習時間」の項目で「全くしていない」「ほとんどしていない」を選択した学生は <b>60%</b>であった。「授業の復習時間」の項目では「全くしていない」「ほとんどしていない」を選択した学生は <b>16%</b>であり、復習中心の学習習慣となっていることが読みとれる。学習は予習・授業・復習のバランスよく行われることが望ましく、適切な予習課題の設定を教員に求めていく必要があると考えられる。また、「勉学や進路など、学生生活について教員や職員に相談する」の項目では、「まったくない」「ほとんどない」を選択した学生が <b>67%</b>となっており、学生にとってより相談しやすいオフィスアワーの運用方法や、周知について検討する必要があると考えられる。なお、これらのことは令和4年9月の教授会において自己点検・評価委員会から報告がなされている。</p>
教育課程レベル	⑤ GPA	<p>GPA は平均が 2.56（中央値 2.61、最大値 3.71、最小値 1.33、標準偏差 0.55）、3.5 以上が 2 名、3 以上 3.5 未満が 8 名、2.5 以上 3 未満が 22 名、2 以上 2.5 未満 9 名、1.5 以上 2 未満が 8 名、1.5 未満 2 名であり、このことから、学生は「科目内容を修得し、学習成果を獲得している」と判断できる。</p> <p>手厚い学生支援・指導の対象となる 1.5（目指す学習成果の獲得基準）以下の学生は、<b>2 名（3.9%）</b>となっている。</p>
	⑥ 単位習得状況	<p>目的に合わせた最適な算出方法を検討しており今回は除外する。</p>
	⑦ カリキュラムマップに基づく学習成果別評価	<p>教養的学習成果において、GPA 平均 <b>2.0</b> 以上の評価を受けている学生の割合は、①<b>65%</b>、②<b>96%</b>であった。</p> <p>専門的学習成果において、GPA 平均 <b>2.0</b> 以上の評価を受けている学生の割合は、①<b>100%</b>、②<b>90%</b>、③<b>82%</b>、④<b>69%</b>であった。</p> <p>このことから、1 年間の学びにおいて、学習成果の獲得が進んでいると判断できる。</p>
	⑧ 成績評価 ⑨ 欠席状況	<p>⑧ 目的に合わせた最適な算出方法を検討しており今回は除外する。</p> <p>⑨ <b>2 年生</b>では全ての科目の出席率が <b>92%</b>を超えている。一方、<b>1 年生</b>では全て</p>



		<p>の科目において 95%を超える出席率である。以上のことから、ほとんどの学生が休むことなく授業に出席している状況にある。</p>
科目レベル	⑩授業評価アンケート	<p>令和4年度の通学課程の前期・後期の授業評価アンケートの結果は、各質問項目に対する回答の平均値は、前期・後期を通していずれも4点前後であり、良好な結果であるといえる。また、「質問16 この授業を、マナーを守って受講しましたか。(居眠り、飲食、携帯電話の使用、私語等)」に関しては、前期 4.32、後期 4.36 と、特に高い評価となっており、学習環境としても良好な状態を維持できている。</p> <p>また、「予習・復習」の項目に関しては、前期 3.54、後期 3.75 となっており、全項目中最も低い平均点となっている。ただし、「質問15 この授業で与えられた課題(宿題など)にきちんと取り組みましたか。」に関しては前期 4.31、後期 4.34 となっている。真面目に授業に向き合っているが、自発的な予習・復習というよりも、課題を通しての授業外学習が中心となっていることが読み取れ、今後学生の主体的な学修を促進することは有益であると考えられる。</p>

アセスメントポリシーによる学習成果及び教育効果の検証 **ディプロマポリシー**

		ディプロマポリシー
		結果と解釈
機 関 レ ベ ル	①卒業率	卒業生 40 名 (45 名入学、退学 4 名、留年 1 名) 88.9% (小数点第 2 位四捨五入) 学位授与数 40 例年 2～3 名の退学者が出るが、昨年度は少し多めの人数になってしまった。教育・学生支援の在り方について検証し、考えていかなければならない。
	②学位授与数	
	③就職率	就職率：97.4% (就職希望者 38 名中 37 名)
	④専門職率	専門職率：89.2% (公務員名 4、私立保育園・幼稚園・こども園 22 名、福祉施設 7 名、一般企業 3 名、自衛隊 1 名から、37 名/37 名)
	⑤進学状況	進学状況：4 年生大学 3 年次編入者 2 名 専門職を中心とした就職状況は良好であった。一般企業等の就職は例年並みと言える。姫路キャンパスの 3 期生 1 名 (7 名中) が、昨年度の姫路市に続き、福崎町の採用試験に合格したことは特筆すべきことである。
	⑥卒業時アンケート	卒業時の 1 月に実施した 2 年間の大学の進路指導についてのアンケートである。進路決定において、「教員からのアドバイス」が突出して高く、次に「実習園の園長・先生」が続くが、大学が進路指導の一環として実施する「進路ガイダンス」や「先輩からの講演」などの評価も高かった。大学教員のアドバイスや進路ガイダンス等が進路決定において役に立っているという学生の評価は、昨年度、様々な進路指導の工夫や改善を行った結果であると考えている。大学の進路指導全般に対する満足度も高く、次年度に向けても進路ガイダンス等の在り方や教員同士の情報共有による学生に対する進路指導の強化などについて検証し、さらなる改善を図っていきたい。
	⑦勤務状況調査	卒業後 1 年目の 6 月から 8 月にかけて就職先を訪問し、園長・施設長等と面談し、聞き取りを行ったアンケートである。本学の取組を高く評価して頂いているコメントや、期待を込めて建設的に書いていただいたコメントも多くある。また、昨年度は 3 年ごとに実施している就職先アンケートの実施年であった。就職先全ての園・施設・企業等から回答を得ているわけではないが、総じて肯定的な評価を頂いており、離職率も 6.7% であった。保育・施設分野に限った離職率の資料はないが、短大を卒業して 3 年後の離職率が直近の調査で 43% であったことを考えると頑張っていると考えられる。 本学の特徴である一人一人の学生に対する懇切丁寧な指導を引き続きやっていくことが、本学の信頼をより一層高めることになるものと考えている。ディプロマポリシーについて、特に変更等の必要性を示す明確なデータはない。
教 育	⑧GPA	卒業生 40 名の GPA は平均が 2.41 (中央値、最高値 3.23、最小値 0.94、標準偏差 0.56)、3 以上が 6 名、2.5 以上 3 未満が 13 名、2 以上 2.5 未満 12 名、

課程 レベル		1.5 以上 2 未満が 8 名、1.5 未満 2 名であり、学生は「科目内容を修得し、学習成果を獲得している」と判断できる。手厚い学生支援・指導の対象となる 2.2（目指す学習成果の獲得基準）以下の学生は、14 名（34.1%）となっている。
	⑨資格・免許 取得状況	保育士資格取得者 38 名（95%） 幼稚園教諭 36 名（90%） 卒業者の多くが資格・免許を取得している。数名が進路等を考えて、資格・免許を取得しなかった。資格・免許取得を第一に考えて入学した学生が、資格・免許取得を辞めたことを重く受け止め、今後の指導に活かしていかなければならない。
	⑩単位習得状況	目的に合わせた最適な算出方法を検討しており今回は除外する。
	⑪カリキュラムマップに基づく学習成果別評価(参考)	教養的学習成果において、GPA 平均 2.0 以上の評価を受けている学生の割合は、①87%、②96%であった。 専門的学習成果において、GPA 平均 2.0 以上の評価を受けている学生の割合は、①79%、②70%、③87%、④57%であった。 このことから、1 年間の学びにおいて、学習成果の獲得が進んでいると判断できる。2 年間の学びの中で、6 つすべての学習成果を獲得し、ディプロマポリシーに合致した人材育成が達せられていると判断できる。